
近世の南海トラフ巨大地震(2)

(石橋克彦、南海トラフ巨大地震—歴史・科学・社会、東京、岩波書店、2014、45-61)

2014年10月17日、災害医学抄読会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

この文章では近世の日本における大地震の考察を行っています。まず江戸時代近辺において日本では二つの大地震が起こり多大なる被害を出しました。まず元禄・宝永地震（1703・1707年）だが、この場合、まず南関東を巨大地震と津波が襲撃し、その4年後に東海地方以西を日本最大規模の巨大地震が起きている。そしてその49日後には宝永地震が誘発したと考えられる富士山の宝永大噴火が始まるという大災害へと繋がった。

また1605年の慶長九年地震では巨大な津波地震が起き、太平洋岸で甚大な被害を出したが、これは伊豆・小笠原海溝地震との説が有力である。その後1614年に慶長19年地震が発生する。これは南海沖から東海沖まで広がる南海トラフ沿いのプレート間地震であると考えられる。

これらの歴史を振り返ったうえで、東日本大震災を考えると、我々の価値観や生活を一変させるような巨大地震が近いうちに起こることも容易に想像できるので、もしそうなった場合を想定して、災害医療の体制をしっかりと構築していく必要があると考えられます。